九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『とりかへばや』の研究 : 伝本と読解をめぐって

千葉, 直人

https://hdl.handle.net/2324/7182263

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：千葉　直人

論 文 名　：『とりかへばや』の研究――伝本と読解をめぐって――

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

『とりかへばや』は平安時代後期に成立したとされる作り物語であり、『無名草子』などによって『古とりかへばや』と、それを改作した『今とりかへばや』の二つの『とりかへばや』が存在したことがわかっている。前者はすでに散佚しており、現存するのは改作本のみである。基礎研究の面では、『とりかへばや』の伝本は一つの共通祖本から通常本・異本の二系統に分岐し、通常本は第一種から第四種、異本は第一種・第二種にそれぞれ分類されることが明らかになっているが、各系統がいかなる関係にあるかはわかっていない。また、従来の研究では、『とりかへばや』がいかに先行作品を受容し、独自の展開を生み出していったかが主な問題点となっていた。
このような研究状況のもと、本論文では伝本系統と先行作品の受容を中心とした作品の読解という二つの観点から作品にアプローチし、『とりかへばや』のありようを解明することを目指した。第一部では『とりかへばや』の伝本について考察し、第二部では作品読解を試みた。各章の概要は以下のとおりである。

第一部第一章では、伝本系統のうち特に未整理であった通常本第四種について考察した。第四種は他系統のいずれにも属さない伝本として便宜的にまとめられた系統であり、その実態は不明のままであった。そこで第四種の本文と他系統の本文を比較することにより、第四種が第一類と第二類の二つのグループに分岐することを明らかにした。また、第一類と第二類がそれぞれ第三種と異本へ派生する可能性について述べた。

第一部第二章では、浚明本と称される通常本第三種について検討した。浚明本は近世の国学者である山岡浚明の校勘を経たとされる伝本であり、浚明の序文と詳細な傍記・頭注を持つことが特徴である。また、序文の署名を「宿祢俊明」とするものと「明阿弥陀仏」とするものの二種類に大別される。これらの浚明本がどのようにして成立したかは明らかではなかったが、他系統と浚明本本文を対照することで、浚明本が通常本第四種第一類を基として成立したことを論じた。また、各種浚明本の差異が、浚明自筆本の編集段階ごとに書写されたために生じたものであると結論づけた。

第二部第一章では、巻一に見られる「蓬萊洞の月」という漢詩句引用について、その意味を考

察した。「蓬萊洞の月」と対偶をなす「蘭蕙苑の嵐の紫を摧いて後」という句の「蘭蕙」が象徴する意味をはじめとして、『御津の浜松』の同詩句の引用箇所についても検討した。そして、文時詩句を朗誦することで、女君が〈女〉への憧れ・厭世心を抱きながら自己を内観しているということを明らかにした。

第二部第二章では、巻三に見られる「翠竹のほとりの夕べの鳥の声」という漢詩句引用について論究した。女君が朗誦した詩句の中の「竹」「暮鳥」という詩語の象徴性や女君の「世づかぬ身」への思いに注目し、女君の隠遁願望に加え、宰相中将との関係を続ける四の君を詰りながらも、そこから離れることに対して心残りがあることを女君が表出したものであると、当該句引用を位置づけた。

第二部第三章では、巻四の宰相中将による垣間見場面を例に、一つの場面に複数の先行作品の表現が連鎖的に引用される意味について考察した。先行研究では当該場面に『源氏物語』「橋姫」巻と『夜の寝覚』の影響が見られることが指摘されていたが、複数の先行作品が引用されている点に注目したものはなかった。そこで、先行作品の表現と展開を分析し、引用の連鎖が先行作品の展開を想起させ、読者の意識を様々に誘導する機能を果たすことを論じた。

第二部第四章では、巻一の九月十五夜場面を取り上げ、不審と思われる箇所について検討した。まず「わが身にさりて」という不審本文に注目し、「わが身になりて」と校訂する注釈書の解釈と「わが身にさりて」と底本を尊重する解釈のいずれもが不適当であることを指摘し、「わが身にとりて」と校訂することで先行研究の問題点を解消した。また、「いと罪深くのみ……」という台詞の話者について、先行研究では女君と宰相中将の二つの説が存在したが、宰相中将の「かくのみものを思ひわぶらん」という和歌のフレーズと「罪」の意識を併せて考えることにより、宰相中将を話者とする方が適切であることを述べた。

付論は、『とりかへばや』での研究手法を『御津の浜松』という他作品に応用し、吉野の姫君という人物のモチーフを探ったものである。先行研究では『源氏物語』の紫の上・宇治の中の君・浮舟といった女君の影響が指摘されていたが、女君の造型から吉野の姫君には女三の宮の影響が強く認められることを明らかにした。また、そのモチーフが〈形代物語〉を脱する転生という趣向に関わっていると結論づけた。

本論文では、『とりかへばや』の伝本と読解という二つの観点に立って考察した。特に前者については、通常本の各系統がどのような関係にあるかを解明することが課題として挙げられる。本文の比較を通して各系統の分岐点を捉えることで、共通祖本の本文を復原することができると考えられる。そのように様々に検討して得られた本文に基づくことが、『とりかへばや』の適切な読解につながるだろう。